

病棟で手術前伝達麻酔を行った患者の求める看護ケアの評価  
キーワード：伝達麻酔、看護ケア、アンケート、オリエンテーション、不安  
B棟4階 ○柳本亜希 梅本美里

## I. はじめに

当病院整形外科病棟では麻酔効果を確認した上でスムーズに手術を行えるように、手術前にエコーガイド下伝達麻酔（以下伝達麻酔とする）を病棟の処置室で施行し、手術室へ入室している。伝達麻酔は意識下の処置であり、麻酔施行中の患者の精神的・身体的ストレスは強いと考えられる。伝達麻酔について事前にオリエンテーションを行っているが、麻酔を行う際には、患者から苦痛や不安を訴える声が聞かれることがある。そこで現在行っているオリエンテーションから伝達麻酔中の看護ケアについて患者にアンケート調査を行い、評価したので報告する。

## II. 目的

手術前伝達麻酔の看護ケアについて、患者にアンケートを行い評価する。

## III. 研究方法

1. 研究対象者：奈良県立医科大学附属病院整形外科病棟で手術前伝達麻酔を受けた入院中の患者 26 名
2. 研究期間：平成 27 年 10 月 5 日～11 月 30 日
3. 用語の定義
  - ①伝達麻酔：エコーガイド下伝達麻酔。局所麻酔の中でも四肢を支配する末梢神経をターゲットとして局所麻酔薬を注入し疼痛刺激の神経伝達をブロックする方法
  - ②看護ケア：好永<sup>1)</sup>の文献を元に環境面、身体面、精神面に対する看護介入。本研究ではオリエンテーションから伝達麻酔中の看護介入とする
  - ③手術前オリエンテーション：病棟で作成し

たオリエンテーション用紙をもとに、手術 2 日前に看護師から患者に手術前日の準備～手術当日の伝達麻酔前後の流れについて説明

4. 調査方法：質問紙によるアンケート調査術後 2 日目に調査の説明を行い、調査用紙を配布。記載時期及び提出は患者の任意とした。

5. 調査内容：好永ら<sup>1)</sup>の文献を元に作成した一部自由記載のある選択形式を含めた 9 項目

①性別②年代③伝達麻酔での手術経験の有無④看護師による伝達麻酔についての手術前オリエンテーションの理解度・イメージができたか(5 段階評価)⑤患者がより詳しく説明を受けたかった内容⑥伝達麻酔を行った部屋の環境で気になったこと⑦伝達麻酔中に不快に感じたこと⑧伝達麻酔中の気持ち⑨伝達麻酔中の看護師のケアについて(⑤～⑨は複数回答とした)

6. 分析方法：伝達麻酔での手術経験の有無に分けた単純集計

7. 倫理的配慮：本研究は奈良県立医科大学附属病院倫理委員会の承認を得た。対象者には本研究の参加は自由意思に基づくものとし、研究目的と方法、得られたデータは本研究以外で使用しない事を説明し、アンケートの提出をもって同意とした。

## IV. 結果

研究対象者 26 名にアンケートを配布し回収率は 100%うち有効回答は 24 名(92.3%)であった。

患者背景は、男性女性共に 12 名。年代の内訳は 20 代 1 名、30 代 5 名、40 代 2 名、50 代 5 名、60 代 9 名、70 代 1 名、80 代 1 名であった。伝達麻酔での手術経験は有り(以下 I 群)が 5 名、無し(以下 II 群)が 19 名であった。

④ 看護師による手術前オリエンテーション  
1)理解度

I群ではやや理解できたが4名(80%)全く理解できなかつた1名(20%)であった。II群ではとても理解できた5名(26.3%)、やや理解できた10名(52.6%)、どちらでもない1名(5.2%)、あまり理解できなかつた3名(15.7%)であった。(図1)

2)伝達麻酔のイメージができたか

I群ではとてもできた2名(10.5%)、ややできた4名(80%)、どちらでもない、あまりできなかつた0名(0%)全くできなかつた1名(20%)であった。II群では、とてもできた0名(0%)、ややできた11名(57.8%)、どちらでもない1名(5.2%)、あまりできなかつた5名(26.3%)、全くできなかつた1名(5.2%)であった。(図2)

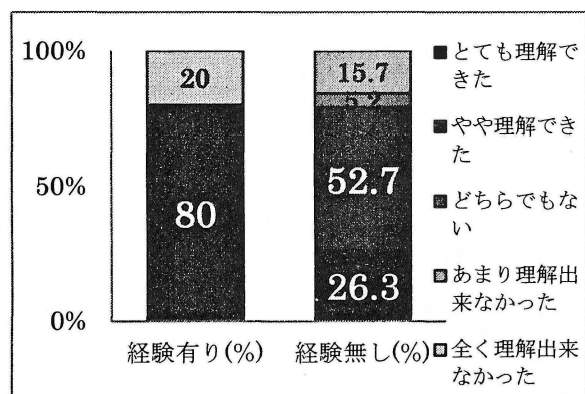


図1. オリエンテーションの理解度

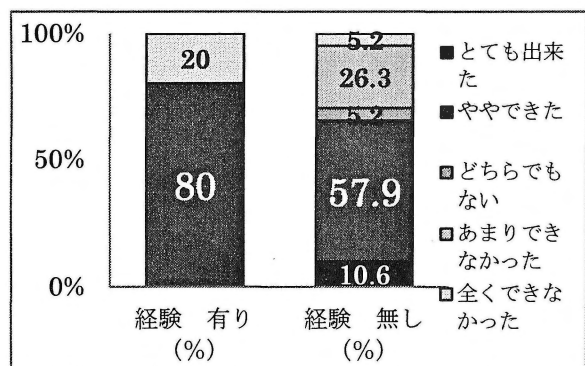


図2. 伝達麻酔のイメージ

⑤ より詳しく説明を受けたかった項目

I群では処置室の環境1名(20%)だけの回

答であった。II群では誰が麻酔を行うのか4名(21%)、麻酔効果の持続時間4名(21%)、処置室の環境3名(15.7%)、おおよその穿刺部位2名(10.5%)、麻酔にかかる所要時間2名(10.5%)、痛みの程度2名(10.5%)、オリエンテーション用紙の記載内容1名(5.2%)、麻酔中の体位0名、その他1名であった。(図3)

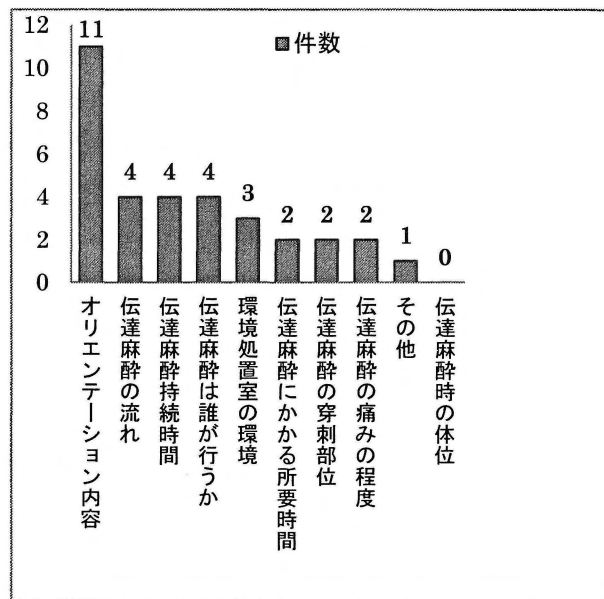


図3. 患者がより説明を受けたかったこと

⑥ 伝達麻酔を行った部屋の環境

I群では特に気にならなかつた3名(60%)、気になることがあつた2名(60%)であった。II群では特に気にならなかつた18名(94.7%)、気になることがあつた1名(5.2%)であった。気になつた内容には寒かつた、部屋の外の音が気になつた、その他がそれぞれ1名ずつであった。

⑦ 伝達麻酔中に不快に感じたこと

I群では不快に感じたことがなかつた4名(80%)、あつた1名(20%)で穿刺部位の痛みのみであった。II群では不快に感じたことがなかつた13名(68.4%)、あつた5名(26.3%)であった。不快であつた内容は姿勢がしんどかつた1名、麻酔の針の穿刺部位の痛み2名、気分が悪かつた1名、眠かつた1名、しびれがあつた2名、その他3名であった。

⑧ 伝達麻酔中の気持ち

I群では普段と変化なかった2名(40%)、緊張していた3名(60%)、怖かった、不安だった1名(20%)であった。II群では普段と変化なかった5名(26.3%)、緊張していた9名(47.3%)、怖かった5名(26.3%)、不安だった8名(42.1%)であった。(図4)

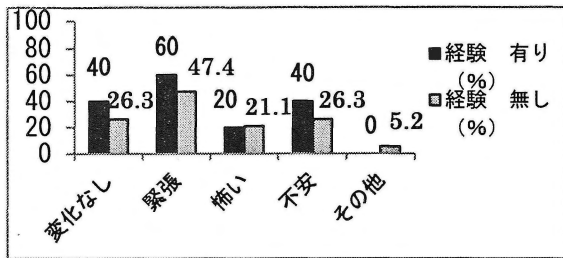


図4. 麻酔中の患者の気持ち

⑨ 伝達麻酔中の看護師のケア

1) 看護ケアで良かったことについて

I群では良かったことがあった4名(80%)、なかった1名(20%)であった。II群では良かったことがあった16名(84.2%)、なかった3名(15.7%)であった。内容については、声をかけてくれて安心した16名、進行状況をその都度説明してくれた9名、側にいてくれた5名、話しやすかった5名、今何をしているのか説明してくれた4名、訴えに対する対応が早かった4名、説明が分かりやすかった1名、羞恥心への配慮をしてくれた1名、手を握ったり背中をさすってくれた1名、話を聞いてくれた0名、その他0名であった。(図5)

2) 患者が看護師に求めるケア

I群では看護師にして欲しかったことがあった2名(40%)、なかった3名(60%)であった。II群では看護師にして欲しかったことがあった7名(36.8%)、なかった12名(63.1%)であった。内容については、今何をしているのか説明して欲しかった3名、進行状況をその都度説明して欲しかった2名、安心できるような声かけ2名、伝達麻酔の分かりやすい説明1名、その他4名であった。(図6)

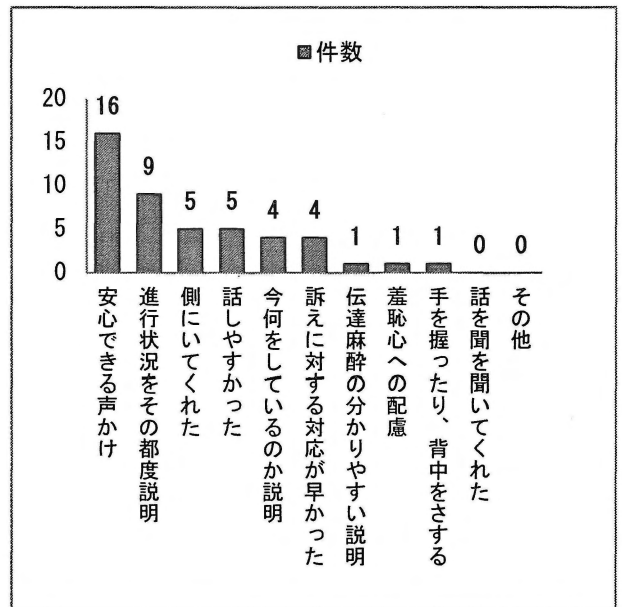


図5. 看護ケアで良かったこと

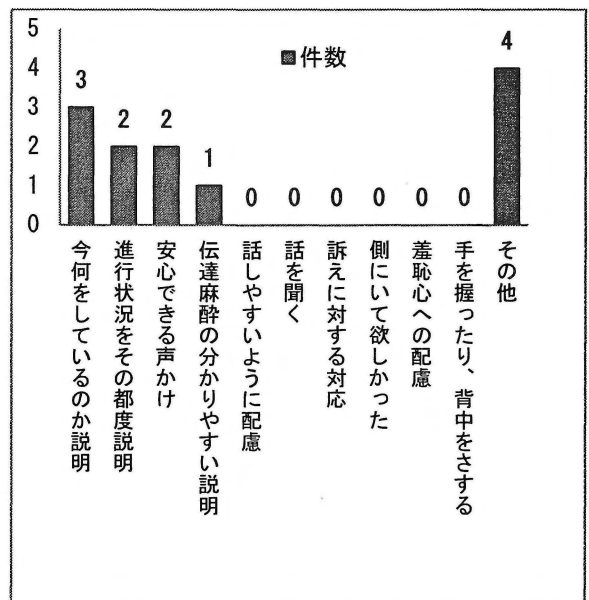


図6. 患者が看護師に求めるケア

V. 考察

アンケート調査の結果、看護師による伝達麻酔の手術前オリエンテーションについては、半数以上の患者が理解・イメージできており、年齢による差は見られなかったが、意識下で行うため伝達麻酔の経験がある患者も緊張や不安、恐怖を感じていることがわかった。以後ら<sup>2)</sup>は過去の経験により手術までの流れを想像できる一方で、過去の術中や術後の痛みが抵抗要因になると述べている。このことか

ら意識下での処置となるため、年齢や伝達麻酔の経験を問わず患者は緊張や不安を感じていることがわかった。

須藤ら<sup>3)</sup>は術前に十分な情報提供を行うことは患者の手術に関する不安の軽減に有効であると述べている。オリエンテーションでは伝達麻酔前後、術後の様子を説明しているが、伝達麻酔中の様子についてはオリエンテーション用紙に記載されていないことから、伝達麻酔前後のイメージはできていても、麻酔中の様子は患者にはイメージし難い結果になったと考える。また、手術は痛みを伴うため麻酔効果により手術後どれだけの時間、痛みなく過ごせるのかは患者にとって重要な情報であり、アンケート⑤の患者がより知りたかった内容として、伝達麻酔中の環境や体位・痛みの程度などが結果として表れたと考える。このことから、患者が手術前オリエンテーションの内容を正しく理解できているかを確認しつつ、患者が必要とする情報を十分に提供することが不安軽減につながると考える。

今回のアンケート結果より、伝達麻酔中の看護ケアで良かったことと、患者が求める看護ケアは、共に進行状況や何をしているのかの説明であった。小松<sup>6)</sup>は「手術や麻酔の具体的な説明を受けることは、自分が直面している状況をより明確に把握する材料にもなる」と述べているように、患者は進行状況等の情報提供を求めていると考えられる。

また数間ら<sup>5)</sup>は患者が最も心休まる時は手術室スタッフの心のこもった配慮、つまり暖かな声掛けと適切で押しつけでないケアが提供されたときであると述べている。また木下ら<sup>4)</sup>はそのタイミングは陰性感情が生じそうな時や生じた時であること。そのタイミングをつかむために、看護師は常に患者の様子を気かけ、陰性感情を素早く読み取ることが重要であると述べている。伝達麻酔は仰臥位で行われており、患者の視界からは今行われていることなど、進行状況が分かり難い状況

である。そのため患者は看護師からの声かけや説明を聞くことで状況を理解し、次に行われることを予測することができ、安心に繋がっていると考えられる。

## VI. 結論

- ・手術前オリエンテーションでは伝達麻酔中の流れに関する情報提供が不足していた。
- ・伝達麻酔中の看護師のケアについては80%以上の患者が良かったと感じていた。
- ・伝達麻酔の経験の有無に関わらず、伝達麻酔中は患者への声掛けや状況説明の重要性が示唆された。

## 引用、参考文献

- 1) 好永尚史・谷次裕美・逢坂美樹他：意識下で整形外科手術を受ける患者の手術中の看護に対するニーズ—安全・安楽な手術看護を提供するために—, 中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌 VOL.8 2012
- 2) 以後千恵子・上田素子・内田みはる他：手術経験を持った患者の局所麻酔手術に対する思い—インタビュー調査を行って—, 中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌 VOL.8 p.172-175. 2012
- 3) 須藤朋子・加護亜衣子・小林瑞恵：外来局所麻酔下手術における患者の不安に対するクリニカルパスの有効性を考える, オペナリング 20(5), p95-100. 2005
- 4) 木下亜伊・奥村志保子・上平直子他：局所麻酔手術中に患者に生じる感情とその誘因について, 第43回(平成24年度)日本看護学会論文集 成人看護 I 2013
- 5) 数間恵子・井上智子・横井郁子：手術患者のQOLと看護(第1版), 医学書院, p.40, 1999
- 6) 小松浩子：手術患者とインフォームド・コンセント, 臨床看護, 20, 1862-1865, 2001